

第34回泌尿器科漢方研究会学術集会

会長： 寛善行(香川大学医学部泌尿器科学教室)

会期： 2017/6/17 ～

会場： コクヨホール(東京都)

ワークショップ

座長： 順天堂大学 堀江 重郎
東名古屋病院 岡村 菊夫1. 放射線療法による有害事象に対する
漢方薬の効果大阪医科大学 放射線医学教室
新保 大樹

放射線装置や照射技術の進歩により、様々な悪性腫瘍が放射線治療を含めた集学的治療で根治を目指せる様になった。根治率を上げる研究は多数されているが、有害事象を減らすことが、大きな課題となる。泌尿器科領域の放射線治療による有害事象に対する漢方薬の効果を紹介する。

浸潤性膀胱癌に対する大阪医大式膀胱温存療法は、リンパ領域を含めた全骨盤照射を化学療法同時併用で施行。全骨盤への放射線治療中は下痢等の腸炎症状の有害事象が発症する。重篤な場合は1日20回以上の水様便、粘血便となることもあり、治療継続が困難となる。

放射線腸炎の下痢に対して、五苓散を処方し、治療効果を検討した。全骨盤照射中にGrade2以上の下痢を認めた68例に対し、五苓散投与1週間後の、下痢回数の増減、 Bristolスケールによる便形状変化を評価した。五苓散投与時の照射線量の中央値は22Gy (12-44Gy)。症状出現から処方までの日数は中央値3日 (1-13日)。投与1週間後評価で、下痢回数は、52例 (76.5%) が減少、中央値で3回減少。便形状は39例 (57.4%) が改善した。下痢回数、便形状ともに改善は38例 (55.9%)、どちらかが改善は15例 (22%) で、合計すると53例 (77.9%) が下痢症状改善を示した。放射線腸炎の下痢症状に対する五苓散投与は効果的であった。また、処方開始までの日数と症状改善のピアソン相関係数では、中等度以上の相関があり、症状出現から早期に投与した方が効果的と考えられた。

前立腺癌に対する放射線治療では晩期障害としてインポテンツ (ED) が問題となる。放射線治療によるEDの発生頻度は20-45%と報告されている。PDE5阻害剤の有用性の報告があるが、自費診療で、様々な制限もあるため、抵抗がある患者も多い。

前立腺癌に対する放射線・内分泌療法後のEDに対する補中益気湯の効果を検討した。放射線治療 (IMRT・LDR・HDR) 後にEDが出現した症例のうち、75歳以下で、PDE5阻害剤を希望しない15例に対して、補中益気湯を投与2ヶ月後にEDが改善するかを勃起機能問診票 IIEF5と問診を用いて総合的に評価した。平均年齢69.3 (65-75) 歳。放射線治療終了からの期間は中央値19 (7-39)ヶ月。13例 (86.7%) は内分泌療法を施行、内分泌療法終了からの期間は中央値17 (7-39)ヶ月。開始前のIIEF5スコアは中央値6 (5-14) 点。有効例 (IIEF5スコア、問診ともに改善) は5例 (33.3%)、微効例 (IIEF5スコア不変または微増で問診にて少し改善) は5例 (33.3%)、無効は5例 (33.3%) であった。改善例のIIEF5スコアは中央値4点 (1-9) の上昇を認めた。前立腺癌の放射線・内分泌療法後のEDに対し、補中益気湯の有用性が確認された。ただし効果は軽度であった。